

佐多稲子全集

第三卷／素足の娘

講談社

佐多稲子全集 第三卷



昭和五十三年二月二十日第一刷発行

著者／佐多稲子

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号一二二

電話／東京（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替東京八―三九三〇

印刷所／豊国印刷株式会社

製本所／藤沢製本株式会社

定価／二八〇〇円

©佐多稲子 昭和五十三年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。 Printed in Japan

目次

夢の彼方									素足の娘
246									7
	姉と妹	小間使の誇り	矜持	気組	雪の夜	分身	営み	荒っぽい波	*
	233		219	206	201	171	159		
		229						151	

視力
269

鳩
284

妻
293

扉
302

台湾の旅
328

旅情
359

挿話
382

あとがき・時と人と私のこと
(3)

393

注解
404

初出誌紙・発表年月
408

佐多稲子全集

第三卷

素足の娘

一

目覚めかけた私の耳に、鶏の声が入ってきた。

太い、威厳のある鶏の声であった。如何にも人に混って、少くとも人の歩くところをも悠々と歩いているというような鶏の声であった。けれども鶏の鳴声のこゝとだから重々しくはない。外の明るい朝の光りと、空の広さとが分るような鳴声であった。

——ああ、違った土地へ来ていた。——

と、私は急にその鶏の声ではっきり目が覚めた。

兩戸はまだ閉まったままだったが、隙間から差す光りは白くて、六畳の部屋の中は薄く見分けられた。父親はもう出掛けてしまっている。隣りの部屋も、もう誰もいないらしい。階下から、この家の内の人たちの

声高に話すのが聞えてくる。階下は魚屋であったが、可成り大きいらしく、水に濡れた土間の隅には丸い石囲いの井戸などがあつたのを私は思い出した。

窓の外の往来からも、よく透る人の話し声が聞えてくる。みんな耳なれぬ声である。言葉の違うのも分る。鶏の鳴声はまだ続いている。

——ああ、他所へ来ていた。——

と、私はまたしても、自分の寝ている周囲を耳なれぬ話し声に感じた。

東京の家では、祖母たちはもう仕事を始めているであろうか。そう思うと、祖母が、今朝はもう傍にいない孫娘のことを、きつと心に描いているにちがいない、と、仕事の手は動かしながらその黙っている表情にありありと心の内を見せている姿まで想像され、老人を置いてこつちへ来てしまったことがすまないような気持ちになるのであった。が、仕方がない。突然こうなってしまったのだ。私は決して自分ひとりの希望など言い立てたのではなかった。むしろその逆のきつかけから、私ひとり父親の勤務先のこの土地へ呼び寄せられることになったのである。

——田舎だっといういわ、ああ！——

と、私の心が弾んだ。

私の運命が、新しい視野へ方向をむけたのだ。そう思うと、老人への思いやりよりも、自分の希望の方へ、そして自分の今いる環境の方へ新鮮な関心が湧いた。

起き上って雨戸をくると、細い紅殻格子の向うに、暖かそうな冬の陽を浴びた、ごたごたした一廓の家並が見えた。この家のすぐ前の道に沿って広い川があるが、川には水は殆ど無くてごろごろと石ばかり白い肌を見せている。鄙びた長い橋もすぐ上手に見え、そのあたりから、ごたごたした家並は川の向うに、山裾を捲いているのであった。さっきから鳴いていた雄鶏は、雌鶏を従えてこの河原におりて、恣^{はじ}ままに陽を浴びながら餌を漁っている。

長崎という幾分特殊な市に生れて、そこで至って都会的に育ち、そのまま東京へ移り住んだ私は、殆ど田舎を知らなかった。この眺めをまるで新鮮に見た。何だかここには自由があるかのように。

海は、この家のうしろ手の方角にあることは、昨夜ここへ来る道で知っていた。川向うの家のごたごたした感じは、それが農家ではなくて、むしろ漁師の家だ

からなのであろう。階下の魚屋の屋台骨の大きいような感じも、この村が半農半漁でありながら、どこか港町であることを思わせる。

しかしそれよりもっと、今も何か忙しそうな声の聞えてくるこの魚屋を、そのように活気づけているのは、この瀬戸内海の小さな港にあった船工場が、急に造船所となって上を知らないような拡張を続け、村には忽ちにして人が溢れてしまっているその故なのであった。が、人がみんな造船所へ働きに吸いとられてしまっているその時間は、うらうらと陽が照り、ただ何となしに生き生きとしている感じにとどまっていた。その時の私が特にそれを感じとったのではなく、私は私の主観で生き生きと息をしたのであるが。

小さな机の上の置時計を見るともう九時であった。ちよつと目を大きくしながら、それでも私は蒲団をたたむまえに、もいちど、そのまだぬくもりの残っている中へもぐり込んだ。そしてわざと仰向けに足を伸ばして、じろじろと部屋を見廻した。

父親の独り暮らしの部屋、しかしそれにしてもあんまりいい部屋ではなかった。北向きで暗い故だけでなく、第一父親は何も荷物を持っていなかった。雑な机

と、小さな瀬戸火鉢だけである。二階には、この六畳の部屋の他にすぐ襖一枚へだてて、十畳の間がならび、うしろ側にやはり襖だけで仕切った三畳があつて、都合三間あつたが、十畳の部屋には大勢の職工がごろ寝のようにして泊つていた。三畳の方にも職工が二人いる。私の父親は職工ではなく、職工の青い服と区別するように黄色い服をきた社員であつたから、彼は六畳を一人で占領しているのであろうが、ただそれだけのことで、襖のすぐ向うにがやがや蕪雑な男たちの声のしたこの部屋も何ということなしに見すばらしかった。これには昨晚、私は自分の抱いてきた期待が少し上等過ぎた、と反省しなければならなかつたのだけど、それだけちょっと悲しい気持もした。

今見ると、父親は本当に何も持っていない。如何にも一度東京でも落ちぶれて、やつとここへ拾われた境遇が見えるのであつた。私は智とくそれを感じ、あんなに東京では恨んだり、軽蔑したりしていた父親へも、気の毒に思うような心が起るのであつた。

階下では引きつづき、何だか忙しそうな気配がしている。私は朝飯を食べさせて貰うことを思うと、寝坊をしたことが急に気兼ねになつて、それそわしてき

た。それで尚ぐずぐずしていたが、とうとう起きて、階下へ顔を洗いに降りた。

赤い手絡の丸髻に結った大柄の嫁さんが土間でたくさん皿小鉢を洗つていた。すつきりした若衆であるその髻さんは仕入れてきた魚の始末をしている。父親は息子より漁師あがりらしく頑丈で、陽に焼けたのがすっかり地色になつてゐる皮膚の厚い、しかし目鼻立のとのつたその顔には親しみを覚えて、上り框で同じような風態の客と話している。母親は甲斐性らしい夫や息子に似ない、少し目の縁のくちやくちやした、それでもやはり人の好きそうな丸まっちい身体で茶を淹れている。その上に色白のおばあさんがひとりいて、つまり父親の母であるが、それは孫息子に似て、小さいながら小ざつぱりとした、きりよう好しだったらしい唇の小さな顔で帳場のあたりに坐つていた。それがこの魚屋の家族の全部なのであつた。私はそこへみしみしと音をさせながら梯子段を降りていった。

「おはようございます」

と、小さい声で、しかしきつぱりとした東京言葉で言うくと、嫁さんが笑顔で、

「お早うさんです。くたびれなはつたでっしやる」

と、愛想よく言つて呉れた。そして濡れた手を拭きながら、私の顔を洗うのを世話をして呉れた。

「御飯出来とりまっせ。二階で食べなはる？ 階下でよろしやろ」

と、奥の上り框のそばに布きんのかけてある足のついたお膳を真中へ出して呉れた。

私は土間の方へ向つて坐り、そこで味のちがう味噌汁で朝飯を食べた。十畳の部屋にごろ寝していた職工や、そして父親もきつとここで朝飯を食べて、暗い内に出掛けていったのであろう、と、私は思いながら、自分の身がやっぱり急激にお嬢さんに早変わりしたのではなかったことを、魚屋の人たちの、不親切ではないが、何か見透したような狎れ狎れしさの中に感じた。そりゃア当り前だ、と私は、自分の可愛い柄ではあるが紡績紺の一枚きりの羽織姿を考えた。

が、私は二階へ上ると東京の祖母や弟へ宛てて安着の第一信を書くのだったが、健気にも彼らが安心するようにばかり書いた。——お父さんは、やっぱり迎えに出ていて下さいました——という書き出しで。

お父さんはやっぱり、という風な言い方は少し妙な言い方であるにちがいない。

二

夕方になると、さあ大変だった。五時の汽笛が鳴った直後には、どこからともないように濁った足音が起きてきて、青い職工服の姿が横町の角に一人見えたかと思うと、それに続いてぞろぞろとあがつてきた。造船所では、職工たちが時間が退けて帰つてくることを、あがつてくる、と言う。私は二階の格子の内からそれを見ていた。父親もやがて帰ってくるだろう。すると私は妙に気づまりなものを感じた。

おかえり、へえおかえり、という階下の人たちの言葉が聞えて、隣りの部屋の職工たちも帰つてきたらしい。父親も帰つてきた。

——へえ、佐多はん、おかえり。——

と、老婆の音がする。

はにかみやの父親は、聞えないくらいの返事しかない。すぐみしみしと梯子をのぼってくる。

私は素早く格子の傍を離れた。父親の神経質な一瞥があることを承知していた。座敷の真中に宙ぶらりん立っていて父親をむかえた。

「おかえんなさい」

父親は、ああ、とも、うむ、とも聞える曖昧な返事をして、しかし私を見はしなかった。父親も何だかばつ、の悪そうな気弱な表情をしていた。しかしそういう時の表情は、彼の機嫌のいい時、といつても特に機嫌がいいというのではないが、心の平静な時の顔なのである。あるいは自分では気づかないまま自分を押えているときの顔なのかも知れなかった。他人の前ではないともそんな顔をするのを、私は知っていた。

昨晚、私がここへ着いた時、階下の老人は、

「へえ、佐多はんの嬢はんだったか、大きい嬢はんやなア。そやけど、よう似とつてや」

と、言つたけれど、私は自分が父親に似ていると思つたことはなかった。私が長目な顔なのに、父親は、長くもなく、そうかと言つて丸顔でもない、手頃の寸と手頃な角度のある顔立ちであつた。鼻孔のいかつた筋の通つた鼻、幅のひろい二重瞼の目、少し気むずかしそうな口元などは、何という特長のないまま、標準的で、色の黒い、粗い皮膚の額に、艶のいい髪の毛のたつぷりしているのを分けてあるのが彼を男らしく見せていた。

大きいけれども強くは見えない父親の二重瞼の目に對して、私は自分ではそれが気に入っている一重瞼の目だったし、前の二本の歯は、唇の閉じきれぬほどではないが、外へ反つていて、これも父親とは違つていた。髪の毛の黒いのだけが父嬢おやは似ていたけれど、それでも人から似ていると言われれば、そういうところもあるのだろう、ということは分るのだった。

父親は詰襟の木綿の黄色い服を脱いで丹前に更えた。靴下のまま坐つて、

「退屈したろう」

「ううん、ちつとも」

いそいで頭を振つて笑顔をした。

となりの部屋では職工たちが、荒い声でがやがやしやべつたり、どすん、と物音を立てたりしている。

職工たちの言葉も長崎弁である。みんなこの造船所の拡張で、長崎のM造船所から引き抜かれてきているのである。

「佐多さん、お銚子つけまつか」

大柄な嫁さんの白い顔が梯子段から覗く。

父親は腰を浮かして、ちよつと手を上げ、にやつとして、

「ひとつ、ねがいます」

それで階下からは田舎びた安ものの銚子を一本つけて足のついた膳を二つ運んできた。

「よろしゅうおあがり」

と、嫁さんは父親に会釈をして忙しそうに降りていった。

父親と対い合せて御飯を食べることなど、ずい分久しぶりであった。その故もあるのか、二人とも変にぎこちなくしている。前をふくらして大きくうしろの方へ巻いた髪に結っている私は、年よりはずっと大きく見え、そうやって父親と対い合っている恰好は、まるで少し若いお嫁さんかとも見えたにちがいない。

それに父親は非常に年が若かった。父親の十九歳の時に私は生れている。だから年齢的にいっても兄と妹位であったし、それにまた、自覚なしにいつか子供が生れた、という風に、父親は早く親になったからといってちつともそれらしくなく、むしろ却って、子供など持ったことのない独身男のように若く見えるのであった。私の八歳の時に、私と、六歳になる弟の辰巳と二人をおいて二十三歳の若きで母親が亡くなってから、祖母の愚痴の聞き手になったりしていた私は、世

帯など構わぬ父親の代りみたいになつていた。

いつか父と私が東京で肉屋へ御飯を食べに入つた時、父親の顔なじみの女中は、私をちょっと傍へ除けるような口振りで、

「佐多さん、あんまり若いでしょう」

と、含み笑いを押えて、つん、とした顔をして見せた。

兄妹どころでなく、危くすると情婦に見間違えられるのであった。

そして気持の上でも、普通の親子にはない一種のへだたりと遠慮と、素っ気なさ、容赦のなさ、それでいて、対等に認めるような愛情と父親のそういう愛情に対して、私もまた理解ある同情を示すといったようなものがあるのだった。

父は、ちびり、ちびり、とやっている。私が十五歳だから、十九の時に親になった父はその時三十三歳であったが、会社での同僚たちとのつき合いは別だけど、その他のところでは、自分の肉親の者ともあまり気軽に口をきかない性分で、少し酒の氣が入るとそれが少し自由になるのであった。

私はそれを知っていたから、父が黙っている間、自

分の方でも口をきかないで、御飯を食べた。東京では見ない、舌遍羅^{しんぺんら}というその名前のように舌のように扁平な魚が煮つけてある。柔かい白い肉は、淡いけれど、細かい味がした。

父は話のつづきのように、のっけから言い出した。自分の気持の中ではつづいていたのであろう。

「吃驚^{びっくり}したよ。突然、芸者になる、なんて手紙寄越すもんだから。いったい、どういうことだったのかい」
私の方でも用意していたことなので、さっと顔を上げたが、すぐ伏せて、

「芸者になろう、と思ったの。本当に」

「ふむ、どうして」

「だって、お祖母さんが可哀想なんですもの。お祖母さんに樂をさせてあげようと思ったのよ」

「ふむ」

父は、そう言われると、やはり少し照れるというように徳利をかたむけながら、

「まあ、よかない」

と、長崎の言葉で言った。

私は、芸者になろうと決心したあの晩の出来事を、もつと説明したかったのだけど、父親の、まあ、よか

たい、で、うまく逃げられたような形で黙っていた。
「それで、こっちに来る時には、別に差支えなかったんだね」

「ええ。みんな喜んで呉れて、辰巳が可哀想だったんだけど」

弟の名前を持ち出してそんな風に言うのと、父は気の重くなることは何でも避けようとするように、

「辰巳は元気にやっとなるかね」

と、可哀想だった、ということは問わずにそう言う。

「ええ、元気にやってはいるわ」

と、私はすぐ父に譲歩する。父は、そういう私の伶俐さが好きだった。それで、辰巳のことも何とか触れねばならない気になって、

「まあ、辰巳のことも、そのうちには何とかなるだろう」

と、娘をとも自分をともつかず慰めるように言った。

お酒が血をめぐって、父親の二重瞼の目はようやく人をはばからぬような光りを帯びてきていた。

「それで、お前は、こっちでは、どうするつもりか

い」

「え？」

と、私は父親を見上げた。妙な間い方をする父親だ。自分の方で呼んでおいて、こっちは、どうするつもりか、と聞いたって、それは私の方で父親に聞きたいことなのだ。お父さんはこういう頼りない、いわば意地の悪いみたいなのところがあるから嫌いだ、と、思いながら、口籠もった。

「どうするって？」

「何もせんわけにもゆかんだろう」

「ええ」

私はちゃんと胸に描いてきたのだ。父親にそれを口に出して言うのは恥ずかしかったけれど、

「私、学校へゆきたいわ。実科女学校でもなんでもいいから」

「学校へ、ね。それもよからう」

父は、さて面倒になつてきた、というような気がしたのか、ちょっと区切ったが、

「今から、女学校へゆけるかい」

「ゆけるでしょう。何とかすれば」

「そうだね。何とかすればゆけないことはないだろう」

う」

もう今更女学校の新人生でもなさそうな柄に、私は見えたのにちがいない。そのうちに私が昨夜来た時と同じ服装なのに気づいたらしく、

「お前、着物はそれ一枚かね」

「ええ。着物はあるけど、羽織がね」

と、私はすまなさそうに微笑んだ。

「着物なんか、すぐ出来るさ」

と、父は、それだけは確かなように受合つて、盃を伏せ、

「飯をついでくれないか」

と、茶碗を差し出した。

「はい」

と、私は両手で受け取ったが、何故だか、父親ひとりの前に坐つて、そうやってお給仕をするのが変に氣まりが悪く、男女間の羞恥みたいなものが私の氣持の中に湧くのであった。感じの敏い父親がそれを見抜くのではなからうか、と思うと、私はますます自分の態度にこだわった。

隣りの部屋の職工たちはがやと外へ出て行つたらしい。冬の夜だというのに、表を歩く人の足音はな